

＜理科における活用のポイント＞

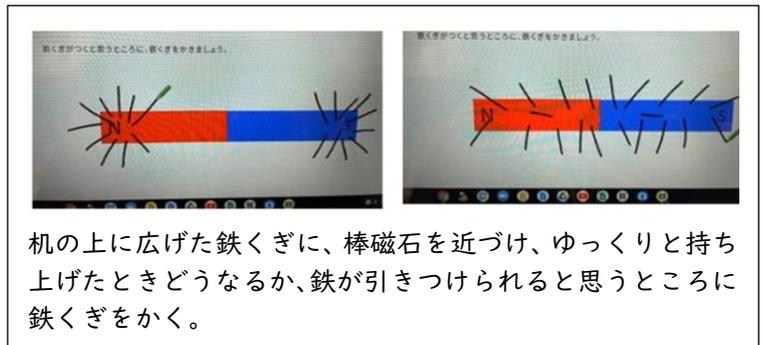
ICTを「観察、実験の代替」としてではなく、理科の学習の充実を図るための有効な道具として位置付け、活用する場面を適切に選択すること。

事例1 予想や仮説を立てる場面

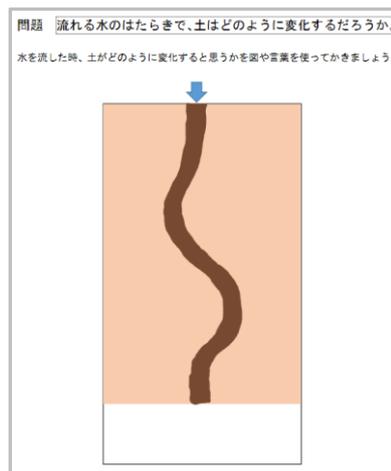
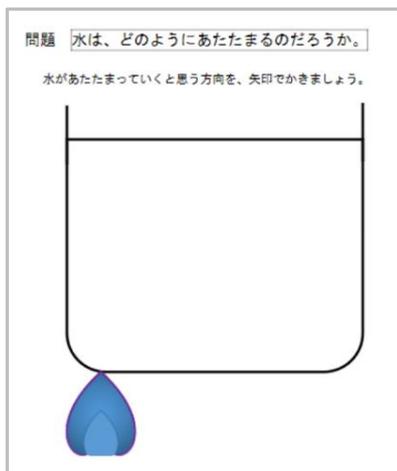
第3学年「じしゃくの性質」、第4学年「物のあたたまり方」、第5学年「流れる水のはたらき」など

使う機能：配布、かき込み、提出、共有

- ①ワークシートを見童の端末に配布
- ②児童が予想をかき、提出
- ③全員から回収したワークシートを大型モニターで提示し、予想図を共有
- ④予想図を示しながら、そのように予想した理由を発表



＜ワークシートの例＞



効果的ポイント

児童1人1人の予想を即時に全員に共有できることで、多様な意見や考えを知り、観察・実験を行う上での視点をより明確にして、観察・実験に臨むことができる。

事例2 問題を見いだす場面、予想や仮説を立てる場面（根拠を見つける）

第5学年「物のとけ方」、第6学年「大地のつくり」など

使う機能：カメラ、録画

- ・端末を持ち帰り、身の回りの事物・現象の中から問題を見いだしたり、問題解決の糸口となる予想の根拠を見つけたりしたときに、写真や動画で保存しておき、授業で生かす。(★)



効果的ポイント

何気ない身の回りの自然の事物・現象を理科の見方・考え方を働かせて、捉えることができるようになる。

この清涼飲料水には食塩が含まれているとラベルに書いてあるし、味もあるよ。だから、食塩はとけて、目に見えなくても水の中にあると思うよ。

道路横のがけが、しま模様に見えるのはどうしてかな。